

氏 名 : 野澤 涼子  
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)  
学位記番号 : 博甲第 246 号  
学位授与年月日 : 平成 27 年 3 月 17 日  
学位授与の要件 : 学位規則第 4 条第 1 項該当 課程博士  
学位論文名 : 大岡昇平文学テキストにおける葛藤の様相  
—文学と教育の接点を追って—  
論文審査委員 : (主査) 教授 大井田 義彰  
(副査) 教授 杉森 伸吉 教授 石井 正己  
教授 寺井 正憲 教授 一柳 廣孝

## 学位論文要旨

本論文は、大岡昇平の文学テキストに対してイデオロギーや諸バイアスに意識的な読みを展開することによって、テキストの持つ個別性を見出し、文学と教育の接点を探ることを目的としたものである。

第一章ではまず「俘虜記」を、国語教科書の教材としての面を中心に論じた。「俘虜記」は大岡テキストの代表作の一つであるが、国語科教科書においても戦争文学教材として定番教材の一つとされている。初めに「俘虜記」が国語教科書に採録されるまでの流れをたどり、〈戦争〉や〈平和〉について考えさせるといふ戦争文学教材全体に及ぶイデオロギーを批判的立場から検証した。更に「俘虜記」の文学テキストとしての先行論を見直し、これまで読まれてこなかった、語る「私」の葛藤について分析し、「俘虜記」を読む上での重要な部分を浮上させた。第二章では「母」について論じた。語り手／書き手である「私」は、母つるの言動を〈合理的〉に回収し、傷ついた「私」像を隠蔽している。また、大岡テキストに反復されている母娘関係の葛藤というモチーフが、母つると祖母くに（大祖母友枝）との関係にも見て取れるが、「私」は母つるが抱えていた葛藤や受難を描き切ることをしない。一方でつるが何らかの苦しみを感じていたことを救い上げようとするような語りも見せるなど、「私」の語りの揺らぎを読むことができる。この揺らぎや捻じれの中から浮上する「私」像を、語りのレトリックに注目しながら追った。第三章では「黒髪」について論じた。ヒロインである久子の境遇など「母」との類似点の多いテキストであるが、「黒髪」における特徴として、語り手／書き手がメタレベルの存在であり、ヒロイン久子を物語世界の中に聴覚的な身体性を表象するものとして閉じ込める言説を紡いでいることが見て取れた。また、物語世界内の時制が変わる時、書き手とヒロインという位相の違う両者が作用しあう様相を分析し、「黒髪」について新たな読みを展開した。第四章では「花影」を論じた。「花影」の語り手は物語

世界を俯瞰して見ているかのような全知の語り手の如く見えながら、冒頭部分に用意されている「かも知れない」という表現により、語り手の統制が崩れている部分があることがわかる。ヒロインである葉子はしばしば語り手の語りの中に閉じ込められている。しかし、語られるはずでありながら語られていない部分に着目することで、葉子が「母」や「黒髪」と同様に、母親との葛藤関係に苦しんでいた面が浮上し、「花影」における母娘関係とヒロインの自死とのつながりを見て取った。第四章では葉子の生死と母娘関係の葛藤とを関連付けて考えた。第五章では「母六夜」を論じた。「母六夜」では母と息子の関係における葛藤を追った。「母六夜」では、語り手／書き手である「私」が夢で見た、恐ろしく不気味な老婆と化した母のイメージに対する「私」の苦しみが色濃く表れたテキストとして、あくまで「私」の内部にある母イメージとの葛藤に着目した。また、夢を再構成して語る「私」の姿勢から見えて来る希求を読むことで、母に対する「私」のアンビヴァレントな感情を見出し、母と息子関係に着目することの意義も示した。第六章では「ハムレット日記」について論じた。「ハムレット日記」では日記を書く「私」と、ハムレットの死後について友人に手紙で顛末を知らせるホレーシオという二人の語り手／書き手が存在することに着目した。ハムレットは野心家としての顔を覗かせながらも、確固たる自己の揺らぎを漏出させていく。その様相を分析し、ハムレットの揺らぐ自己の在り方を掘り下げた。そしてホレーシオには、そうしたハムレットの葛藤や揺らぎは理解されず、その言説の中でハムレットは狂人として片づけられてしまうが、ホレーシオの存在によって「ハムレット日記」というテキスト全体の志向するベクトルとハムレットの両面的なあり方の中で揺らぐ自己とが異なっていることを示した。

第一章から第六章までテキストを論じることで、語り手や登場人物の葛藤が重要なモチーフとして見えて来た。葛藤は、二つの価値観や感情に双方から同程度の磁力で引き寄せられ、自らを苦しめる状況を生むが、そのような人間の苦痛や揺れ動く感情の起伏を読むことが、大岡テキストの個別性であり一回性である。そして、文学テキストの個別性と一回性に向き合おうとする姿勢と、教育の現場で求められる姿勢が重なり合うことが見えて来た。大岡テキストは教材としても文学テキストとしてもイデオロギーやバイアスに縛られた解釈がなされてきた経緯があり、それらにとらわれない読みの姿勢で臨むことで、文学と教育との接点を見出すことができると結論付けた。